

## 宿木巻の藤壺女御

——繰り返される藤壺——

栗本賀世子

### 一、はじめに

『源氏物語』には、複数の藤壺と呼ばれる女性が登場する。桐壺帝の藤壺中宮、朱雀帝の藤壺女御、今上帝の藤壺女御の三人である。この中で、宿木巻に女二宮の母として姿を見せる藤壺女御については、次のように述べられていた。

そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける、まだ春宮と聞こえさせし時、人よりさきに参りたまひにしかば、睦ましくあはれなる方の御思ひはことにものしたまふれど、そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに、中宮には、宮たちさへあまたこらおとなびたまふるに、さやうのことも少なく、ただ女宮一ところをぞ持ちたてまつりたま

へりける。わがいと口惜しく人に庄されたてまつりぬる宿世嘆かしくおほゆるかはりに、この宮をだにいかに行く末の心も慰むばかりにて見たてまつらむと、かしづききこえたまふことおろかならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひきこえさせたまへり。  
(⑤宿木・三三三頁)

「故左大臣殿の女御」「人よりさきに参りたまひにしかば」という箇所から、読者は、かつて梅枝巻で明石姫君の對抗馬として最初に東宮に入内した「左大臣殿の三の君」(③梅枝・四一四頁)のことを想起するはずである。しかし、かの巻では「麗景殿と聞こゆ」(同・四一四頁)とあったのであり、内裏におけるその居所が一致しない。両者は同一人物で、麗景殿から後に藤壺(飛香舎)に移ったのである、

とする解釈が一般的であるが、それでも、『河海抄』は「相違おほつかなし」と注し、また、わざわざ殿舎が変更されねばならなかったことに疑問を提示する論もある。<sup>1)</sup>

はたして、麗景殿と呼ばれていたはずの女御の局が藤壺へと変更されたことは、当時の読者にも違和感を生じさせる強引なものであつたのだろうか。前稿では、主人公光源氏の想い人として物語中で重要な役割を果たす藤壺中宮の居所がいかにして決定されたか、『宇津保物語』からの影響という視点から論じたが、<sup>2)</sup>対して、宿木巻の藤壺女御の場合、どこに藤壺へと移らせる理由があつたのか。本稿では、同じ藤壺を曹司としながらも、これまで藤壺中宮に比べて取り上げられることの少なかつた今上帝の藤壺女御について注目し、同様に影の薄い朱雀帝の藤壺女御と関わらせつつ、物語の殿舎設定の意図について考察していきたい。

## 二、御代替わりに伴う皇妃の移動

まず最初に、皇妃の殿舎変更が史実にはどの程度あつたことなのか確認しておく必要がある。増田繁夫氏・高田信敬氏によると、実は皇妃が居所を変える例は多くあつたらしく、早くは醍醐朝に女御源和子が承香殿から麗景殿へ移つており、他にも円融朝に女御(中宮)遵子が承香殿から

弘徽殿へ、女御尊子内親王が麗景殿から承香殿へ、そして一条朝に中宮定子が登花殿から梅壺(凝花舎)へと移つたことなど、枚挙にいとまがない。<sup>3)</sup>ここでは、それらの中から、『源氏物語』今上帝の藤壺女御のように、東宮妃時代から居所を変えた事例について特に取り上げ、詳細に見ていくことにする。

歴代東宮の中で、内裏後宮殿舎を初めて住まいとしたのは、醍醐朝の寛明親王(朱雀天皇)であつた。<sup>4)</sup>以降、当然のことながら東宮妃たちも内裏の中で生活することになる。寛明親王は東宮時代に妃を持たなかつたから、初めて内裏に入った東宮妃は、朱雀朝の東宮成明親王(村上天皇)妃、藤原師輔女安子であつた。安子は、夫の立坊以前、天慶三年(九四〇)に藤壺(飛香舎)で婚礼をあげ、以降東宮妃時代もずっと、夫の居所梅壺に隣接する藤壺で過ごすことになる。村上天皇の踐祚後は、天皇が常御殿たる清涼殿の建て替えのため一時的に綾綺殿に移御するのに伴い、安子も梨壺(昭陽舎)に居を移したが、天皇が清涼殿に遷御すると再び藤壺へと戻つた。その後も、長きにわたり安子は藤壺の主であつたが、天徳四年(九六〇)の内裏火災を経て応和元年(九六一)に新造内裏に入つた際、弘徽殿を新たに居所とした。<sup>5)</sup>

安子に続く東宮妃は、村上朝の憲平親王（冷泉天皇）の三人の妃——朱雀院皇女の昌子内親王、藤原伊尹女懷子、藤原師輔女怙子だが、彼女たちの内裏での居所は定かではない。その後、一条朝では、東宮居貞親王（三条天皇）妃として藤原兼家女綏子、藤原濟時女斌子、藤原道隆女原子、藤原道長女妍子がいた。麗景殿に住んだ綏子と淑景舎（桐壺）を局とした原子は、夫の即位を見ることなく若くして死去し、また、妍子については、入内時は里内裏が使用されてきたため、東宮妃時代は正規の内裏後宮殿舎に入ることとはなかった。では、東宮妃時代も皇后時代も正規の内裏を経験している斌子についてはどうであろうか。

斌子は、正暦二年（九九二）に居貞親王の後宮に入内、叔母である村上天皇女御芳子が宣耀殿を住まいとした例に倣い、宣耀殿を居所としたという（『栄花物語』①みはてぬゆめ）。夫居貞の住まいは、その近くの梨壺であった。その後、内裏は一条朝の間数度の火災に見舞われ、寛弘八年（二〇一一）六月に三条天皇が踐祚した際は、一条院が仮の内裏であった。天皇は同年八月に新造内裏に遷御、十月五日には女御妍子も参内するが（『御堂閔白記』）、斌子についてはすぐに内裏に入ったことは見えない。『栄花物語』は、長和元年（一〇二二）初頭の三条天皇・斌子の和歌のやり

取りについて、以下のように記す。

かかるほどに、宣耀殿（＝斌子）に、内（＝三条天皇）より、

春霞野辺に立つらんと思へどもおぼつかなさを隔てつるかな

と聞えさせたまへれば、御返し、

霞むめる空のけしきはそれながらわが身一つのあらずもあるかな

と聞えさせたまへれば、あはれと思しめさる。

（①ひかげのかづら・五〇一頁）

三条天皇の歌に「おぼつかなさを隔てぬるかな」とあるのは、里邸にいる斌子とは会うことが容易でないことを言うものである。また、長和二年に斌子の参内記事が見えるが、そこに、斌子がそれまで長らく内裏を離れていたことを示唆するような記述がある。

〔斌子ガ内裏ニ〕おはしましぬれば、〔三条天皇トノ〕年ごろめづらしき御物語ども推しはかるべし。御前に火焚屋かき据ゑて、だいしょうじ大床子などのほどのけはひ、上の御前に御覧ずるも、「かうてこそは見たてまつらむと思ひしか。みづからよりはかうては思ふことしたるこそうれしけれ」など、あはれに語らひきこえさせたまふ。

城子と天皇との語らいは、「年ごろめづらしき御物語ども」とされ、天皇は后となった城子の御前にある大床子や火焚屋の様子を初めて目にして、感慨深げである。城子は長和元年に立后しているが、その後も参内の機会がなく、再会が数年ぶりのような描かれ方なのである。こうしたことから、三条天皇即位後の城子について、当時の執政の娘、中宮妍子を憚ってしばらく里邸におり、新造内裏に入ったのは長和二年のことだっただろうと推測する。この参内は、『小右記』『日本紀略』によると三月二十日のことであり、その際に城子は、かつて用いた宣耀殿ではなく、夫帝の御座所清涼殿に近い承香殿に入ったという。

これらの例だけではおぼつかないので、更に時代を下って見てみることにする。次に現れる東宮妃は、後一条朝の敦良親王（後朱雀天皇）妃、藤原道長女嬉子と三条院皇女禎子内親王。登花殿を用いた嬉子は、東宮妃のまま、親仁親王を出産後に亡くなった。一方、禎子内親王は、万寿四年（一〇二七）三月に弘徽殿に入内した<sup>6</sup>。この時敦良親王は梅壺を用いており、本来ならば隣接する藤壺や向かい側にある登花殿あたりが東宮妃の住まいにあてられるはずである<sup>7</sup>。しかし、藤壺は当時の中宮威子の御座所であった。

また、登花殿は早逝した嬉子の曹司であったから、避けられたのではないか。結局、禎子は梅壺からやや離れた弘徽殿に入らざるを得ず、直後に禎子が発病した際、敦良親王が、梅壺と弘徽殿との距離の遠さを案じて、自らの居所を弘徽殿近くの承香殿に移すという事態になった<sup>8</sup>（『栄花物語』③わかみづ・一〇四頁）。長元二年（一〇二九）には、敦良親王は梨壺（昭陽舎）に移御しており、それに合わせて禎子も、梨壺に程近い宣耀殿・麗景殿に住むようになっていた<sup>9</sup>。敦良は、清涼殿の改築に伴い、即位後もしばらく梨壺に留まったため、禎子の宣耀殿・麗景殿での暮らしも続いたようである。

〔姫子女王ハ〕弘徽殿、登花殿かけておはします。内は梨壺になほおはしませば道いと遠し。一品宮は宣耀殿、麗景殿におはしませば、〔姫子女王ハ〕承香殿の馬道<sup>めんだう</sup>より通りにて上らせたまふ。

〔『栄花物語』③暮まつほし・二八七～二八八頁〕

右は、後朱雀天皇即位後、長暦元年（一〇三七）正月に藤原頼通養女、姫子女王が入内した折の記事である。後朱雀朝初めの後宮では、天皇は梨壺を依然として用い、禎子もこれまで通り宣耀殿・麗景殿を使用し、新たに入った姫子は弘徽殿・登花殿を居所としたのだという。やがて禎子

は、中宮、そして皇后に立つものの、その際に内裏を退出し、以後は、頼通を後盾とする中宮姫子、そして姫子の死後に入内した藤原教通女、女御生子の権勢に押されて、宮中に参内することはほとんどなくなり、里がちとなっていた。彼女が次に正規の内裏に入ったのは、長久三年（二〇四二）のことである。<sup>(10)</sup>

皇后宮（＝禎子内親王）、二の宮の御書始にぞ入らせたまへる。あはれにおとなびさせたまへるにも、年月のこと思しめし知られて、あはれに思しめさる。やがて留めたてまつらせたまへば、さぶらはせたまふ。弘徽殿に皇后宮、藤壺には殿の姫宮たち（＝祐子・祿子内親王）のいらせたまふべきにて、置かせたまへり。

（『栄花物語』③暮まつほし・三〇七―三〇八頁）  
所生の第二皇子尊仁親王の書始の儀が行われるため、禎子は皇子に付き添って、内裏に参入した。この頃になると、後朱雀天皇は清涼殿に居を移していたから、宣耀殿・麗景殿では行き来しづらく不便であったのだろう。禎子は、姫子の死後に空いていた弘徽殿に入っている。こうしたことから、禎子内親王は、東宮妃時代に弘徽殿から宣耀殿・麗景殿へ、さらに、夫の即位後に弘徽殿へと度々居所を変更していることが分かるであろう。

さらに後三条朝の東宮貞仁親王（白河天皇）妃、藤原能長女道子と藤原師実養女賢子について見てみよう。

内裏造り出でて入らせたまふ。……東宮は例の梨壺に、その北の屋に東宮大夫殿の女御（＝道子）、宣耀殿におはします。左の大殿の女御（＝賢子）麗景殿など、さまざまに内裏わたりいとをかし。

（『栄花物語』③松のしづえ・四四〇頁）  
延久三年（二〇七二）、新造内裏に移った際、貞仁は梨壺に入り、二人の東宮妃道子・賢子は、梨壺に近い宣耀殿・麗景殿をそれぞれ局と定められている。やがて貞仁が帝位につき清涼殿を居所とすると、賢子は弘徽殿に移ったが（『栄花物語』③布引の滝・四七九頁）、承暦三年（二〇七九）頃までには藤壺に住まいを変更していたようである。道子の方も、承香殿に居を移し、承香殿女御と呼ばれるようになったが（『栄花物語』布引の滝、『今鏡』ふちなみの下・ますみの影）、白河帝が賢子ばかりを偏愛したため、宮中を退出し里邸に引きこもることになった。後に、道子は、永保元年（二〇八二）に、娘の善子内親王の着袴儀のため、久々に参内し麗景殿に入る。<sup>(11)</sup>元の居所である承香殿でなく、帝の住まう清涼殿からやや離れた麗景殿を使用していることが気にかかるが、この場合は一時的な滞在所にすぎず、麗景殿

は本格的な道子の御坐所として整えられたものではなかったのではないか。

以上、平安朝において、東宮妃が後に居所を変える例を多数見てきた。そのほとんどは、夫東宮(帝)が居所を変えることに付随して行われたということが分る。そして、しばしば東宮の居所変更の契機となる出来事が、その即位であった。東宮は、皇位を継承すると、梅壺或いは梨壺というそれまでの東宮御所から、天皇の常御殿たる清涼殿に入御するのであり、その際に東宮妃たちも、夫の新たな居所に近い殿舎に移る、ということが普通だったのである。なお、梅壺よりも清涼殿から離れている梨壺が東宮御所であった時、この傾向はより顕著であるといえよう。すなわち、梅壺周辺の殿舎を東宮妃が住まいとしていた時、その殿舎は比較的清涼殿にも近いため、夫が即位して清涼殿に移っても、皇妃は必ずしも殿舎を変更する必要はない。例えば、村上朝の安子は、東宮妃時代の居所藤壺が清涼殿にも隣接していたため、夫の即位後も、梨壺での仮暮らしを挟んだ後、そこを再び住まいとして使用した。(ただ、安子の場合も、夫は踐祚直後に一時的に綾綺殿に移り、それに従って安子も梨壺を臨時の住まいとすることがあったから、これを代替わりによる居所変更と見て良いかもしれない) 対して、梨壺周

辺の殿舎が住まいだった時は、清涼殿から遠く離れているために、夫の即位後は、清涼殿に近い殿舎に移るといふことが起こったのであった。城子(宣耀殿↓承香殿)・禎子内親王(宣耀殿・麗景殿↓弘徽殿)・道子(宣耀殿↓承香殿)・賢子(麗景殿↓弘徽殿)の例は、いずれもこれに当てはまるのである。

さて、ここで『源氏物語』を振り返ってみると、今上帝の東宮時代の居所については、次のようにあった。

この大臣(＝光源氏)の御宿直所は昔の淑景舎なり。  
梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。

(② 濔標・三〇〇頁)

光源氏の宿直所である淑景舎(桐壺)と東宮の住む梨壺が隣接していることを理由に両者の友好関係を描き、次代においても源氏の地位が安泰であることを読者に予測させるような箇所である。ここに東宮御所が梨壺であることが明示されている。だからこそ彼の二人の妃——左大臣の娘と明石姫君は、入内時にそれぞれ麗景殿、淑景舎<sup>①</sup>という梨壺に隣接する殿舎を局としたのであったが、これらの殿舎配置を史実と照らし合わせて見ると、東宮(今上帝)は、後に即位すると清涼殿に入り、その妃たちも同時に清涼殿

周辺の殿舎に移ったと考えられるのではないか。そうだとすると、かつて東宮妃時代に麗景殿と呼ばれていた女性が、夫即位後に藤壺女御となつていても、何ら不思議はない。一方の淑景舎に住んだ明石姫君の方も、恐らくは夫帝の御代には、淑景舎から弘徽殿か承香殿あたりに居を移したのであろう。清涼殿からは淑景舎は遠すぎ、ここに中宮となる明石姫君が住み続けたとはとても考えられない。

『源氏物語』以前に、御代替わりに伴う皇妃の殿舎変更の確固たる例がないのが、いささか心もとないところではあるが、しかし、夫東宮（帝）の御座所の側に妻の皇妃の曹司もあり、夫が住まいを変えたならば妻も共に居を移す、くらいのことは、慣例となつていたのであろう。当時の物語の読者も、宿木巻で明かされる左大臣の娘の麗景殿から藤壺への移御を、当然のこととして受け止めていたにちがいない。

### 三、物語の内なる準拠

前節で、史実の事例を手掛かりにして、宿木巻の藤壺女御が東宮妃時代から居所を変更しているのは必然的な出来事であったことを示した。しかし、それだけでは、なぜ彼女がよりによって藤壺に住むことになったのかを説明する

ことにはならない。藤壺は、この物語では、桐壺・朱雀・今上帝の三代の御代で皇妃の居所として用いられ、繰り返し物語の中にその名を見せる殿舎である。特に第一部では、主人公光源氏の理想の女人藤壺中宮の居所として強い印象を与えることは、言わずもがなである。前稿では、この藤壺中宮に関して、村上朝中宮安子を準拠とする『宇津保物語』の女主人公あて宮の影響を受けて居所設定が為されたことを指摘したが、朱雀・今上帝の藤壺女御については、どこに藤壺に住ませる要因があつたのだろうか。ここでは、両「藤壺女御」の名が初めて見える若菜上巻と宿木巻に焦点を合わせ、二人の住処を藤壺とする物語のその仕組みを探ってみる。

まずは若菜上巻の巻頭、朱雀院の出家願望が語られる文脈の中で、院の出家の際の絆しともなりかねない鍾愛の内親王——女三宮のことが初めて話題になった。

御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ  
四ところおはしましける、その中に、藤壺と聞こえし  
は、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえ  
させしとき参りたまひて、高き位にも定まりたまふべ  
かりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方も  
その筋となくものはかなき更衣腹にてもものしたまひけ

れば、御まじらひのほども心細げにて、大后（＝弘徽殿大后）の、尚侍（＝朧月夜）を参らせたまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にくぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。そのほど御年十三四ばかりにおはす。

（④若菜上・一七～一八頁）

女三宮の母女御は、先帝の更衣腹の皇女で、臣籍降下していた。朱雀帝の東宮時代に早くから入内しており、身分からいっても「高き位にも定まりたまふべかりし人」だったが、弘徽殿大后が推す朧月夜尚侍の勢威に気圧されて、立后も果たせず、不幸な境遇のまま亡くなっていた。ところで『花鳥餘情』は、この藤壺女御の準拠に、光孝源氏で醍醐帝女御となった源和子を充てているようである。和子は、平安時代を通じて、一世源氏にして後宮に入った唯一の女性であり、所生の韶子内親王が天皇の采配で源清蔭に降嫁しているから、なるほど、女三宮母の準拠としてふさわしい<sup>19)</sup>。ただし、和子の場合には承香殿や麗景殿に住んでい

たのであり、その点では重ならない。また、逆に、『源氏物語』成立以前に藤壺に入った史上の皇妃たちの中で、女三宮の母女御の準拠たりうる人物を求めてみても、後見勢力が弱い、源氏（皇族）出身、夫と娘を残して早世する、などの、この女御と同様の特徴を備える者はいない<sup>20)</sup>。要するに、物語の朱雀朝藤壺女御に関して、居所設定という点では、物語の外側、史実の側からはその理由を見出せそうにないのである。

そこで、物語内部から解決の糸口を見つけるために、今しばらく若菜上巻の内容をたどってみよう。女三宮のことを気がかりに思う朱雀院は、宮の今後の処遇について思い悩んだ末に、準太上天皇という至尊の身である弟光源氏と結婚させることを決意し、内意を伝えさせた。対して源氏は、「院（＝朱雀院）の御代の残り少なしとて、ここにはまたいくばく立ち後れたてまつるべしとてか、その御後見のことをば承けとりきこえむ」（④若菜上・三九頁）と、（院院と同じく）自らももう若くはないことを理由に辞退し、代替案として冷泉帝後宮に女三宮を入れる事を提案する<sup>21)</sup>。

「……ただ内裏にこそ奉りたまはめ。やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなきことなり。それにはさるべきことにもあらず。かならず、さりとして、



末の人おろかなるやうもなし。故院（＝桐壺院）の御時に、大后（＝弘徽殿大后）の、坊のはじめの女御にいきまきたまひしかど、むげの末に参りたまへりし入道の宮（＝藤壺中宮）に、しばしは庄されたまひしきかし。この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ、容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮おしなべての際にはよもおはせじを「など」（源氏ハ女三宮ヲ）いぶかしくは思ひきこえたまふべし。

（④若菜上・四一頁）

他の皇妃たちのことなど気にせずに入内させられるのが良い、桐壺朝の御代の末に入内した藤壺中宮が時めいた例もあるのだし、と、話題はいつのまにか、源氏の初恋の女性、藤壺中宮のことへとそっくり。そして、その文脈の中で、女三宮の母女御が藤壺中宮の異母姉妹であることが語られる。これ以前にも、先掲のごとく、女三宮母は「先帝の源氏」であるとされていたが、この箇所まで読み進めてみて、読者ははつきりと藤壺中宮と朱雀朝の藤壺女御、ひいてはその娘女三宮とのつながりを意識することになるのである。ここで注意しておくべきは、女三宮母と藤壺中宮の藤壺という共通の居所が、より両者の血のつながりを

認識させ、女三宮母が藤壺中宮によく似た高貴で美しい女性であるといメージさせるところにある。性<sup>23</sup>。「容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人」という記述がそれを補強するものになっている。と同時に、藤壺女御の娘である女三宮も、藤壺中宮に匹敵するような女性として想像され、物語の語り手は「源氏ハ女三宮ヲ」いぶかしくは思ひきこえたまふべし」と忖度する。換言すれば、居所の同一性が、藤壺中宮・朱雀朝藤壺女御（とその娘女三宮）を重ね合わせ、物語中の最高の女性の一人である藤壺中宮、若菜巻時点では故人であるその人を物語の中に再び呼び込むという効果をもたらしているのである。そのことが、藤壺中宮ゆかりの女性である女三宮への源氏の関心を引き起こし、後に彼女との結婚を承諾する理由の一つとして働くことになるのであつた。

続いて、今上帝の藤壺女御について見てみることにする。彼女の宿木巻での登場場面については、冒頭で触れたとおりであり、今上帝の最初の皇妃であり、帝の「睦ましくあはれなる方の御思ひ」は優っていたものの、立后が叶わなかったこと、儲けている女宮が帝の鍾愛の皇女であることなど、その来歴は、藤壺という居所も含め、朱雀朝藤壺女御と酷似しているのがまず注目される。この女御は、女二

宮が十四の年にはかなく亡くなるが、残された宮には「後見と頼ませたまふべき伯父などやうのはかばかしき人もなし」(⑤宿木・三七五頁)という状況で、帝は心細い身の上である宮にいつそう愛情を注ぐのであつた。そのような経緯も、若菜巻の藤壺女御・女三宮母子を髣髴とさせよう。では、今上帝藤壺女御は、なぜ朱雀帝藤壺女御を思わせるような描かれ方をされたのであろうか。その答えは、かの女三宮の息子である薫と女二宮の結婚話が進むにつれて明らかになってくる。

①〔今上帝ハ〕朱雀院の姫宮(＝女三宮)を六条院(＝源氏)に譲りきこえたまひしをりの定めどもなど思しめし出づるに、しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞こゆることどもありしかど、源中納言(＝薫)の人よりことなるありさまにてかくよろづを後見したてまつるにこそ、「女三宮ノ」その昔の御おほえ衰へず、やんごとなきさまにてはながらへたまふめれ、さらずは、御心より外なることども出でて来て、おのづから人に軽められたまふこともやあらまし、など思しつづけて、ともかくも御覧する世にや思ひ定めましと思しよるには、やがてそのついでのままに、この中納言より外に、よろしかるべき人、また、

なかりけり。

(⑤宿木・三七六―三七七頁)

②かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮(＝女二宮)の御裳着のことありて、またの日なん大将(＝薫)参りたまひける夜よのことは忍びたるさまなり。……帝の御婚になる人は、昔も今も多かれど、かく、盛りりの御世に、ただ人のやうに婚とり急がせたまへるたぐひは少なくやありけん。右大臣(＝夕霧)も、「めづらしかりける人の御おほえ宿世なり。故院(＝源氏)だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮(＝女三宮)を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」とのたまひ出づれば、宮(＝落葉宮)は、げにと思すに、恥づかしくて御答へもえしたまはず。

(同・四七四―四七五頁)

③〔薫ノ〕かかる御心づかひ(引用者注…女二宮ヲ三条宮ニ迎エルコト)を、内裏(＝今上帝)にも聞かせたまひて、ほどなくうちとけ移るひたまはんをいかがと思したり。帝と聞こゆれど、心の闇は同じことなんおはしましける。母宮(＝女三宮)の御もとに御使ありける御文にも、ただこのことをなむ聞こえさせたまひける。故朱雀院の、とりわきて、この尼宮の御事をば聞こえ

おかせたまひしかば、かく世を背きたまへれど、衰へず、何ごともとのままにて、奏せさせたまふことなごは、かならず聞こしめし入れ、御用意深かりけり。

(同・四七六、四七七頁)

④〔女二宮ノ三条宮へノ引取りガ〕明日とての日、藤壺に上(＝今上帝)渡らせたまひて、藤の花の宴せさせたまふ。……上の御遊びに、宮(＝女二宮)の御方より御琴ども、笛など出ださせたまへば、大臣(＝夕霧)をはじめたてまつりて、御前にとりつつまゐりたまふ。

故六条院(＝源氏)の御手づから書きたまひて、入道の宮(＝女三宮)に奉らせたまひし琴の譜二卷、五葉の枝につけたるを、大臣取りたまひて奏したまふ。

(同・四八一頁)

①で、帝は、かつて父朱雀院が光源氏に女三宮を降嫁させた例を思い出し、「そのついでのままに」今度は、その二人の子とされ世の声望も高い薫に女二宮を委ねようと考えつく。その後、薫の了承を取りつけ、②で、女二宮の裳着の日に、婿取りも同時に行われることになった。夕霧は、在位中の帝の皇女との結婚を許された薫について、その優れた宿世を讃え、光源氏でさえ朱雀帝の退位後、しかも晩年、出家の直前になって女三宮を託されたのであり、まし

て自分などは、父院に許されるどころか、私通によって落葉宮を手に入れたのであった、と回想する。③は、当初女二宮の許へ通っていた薫が、宮中通いを煩わしく思い、宮を自邸へ迎えようとした際、それを聞いた帝の反応について述べる。夫邸へ移る女二宮のことを案じる帝は、彼女のことを頼む旨の文を姑の女三宮に送るのである。そこで、帝・女三宮の異母兄妹の親しい仲について語られ、故朱雀院に頼まれたため、帝は今でも妹宮の扱いを疎かにしないのだと説明される。その例にならって、帝が今度は娘のことを女三宮に頼んでいるような体である。④では、女二宮がいよいよ三条宮に移るという日の前日に、宮中藤壺で藤花宴が催された。御前で演奏を行わせる時に、さまざまな楽器が女二宮方から出される一方で、源氏が女三宮に与えたという琴の譜二卷が、薫から夕霧を介して帝に献上される。ここでも、過去に起こった女三宮の源氏への降嫁が、良き例であるかのように扱われているのである。物語が薫と女二宮の結婚について触れる際、その都度若菜巻の女三宮降嫁の出来事を思い出させているのが、一見して分かるであろう。

ところで、若菜巻の女三宮降嫁と、宿木巻の女二宮降嫁は、与えられた設定こそよく似ているものの、事態が進行

する過程に大きな差異がある。女三宮の婿探しが困難を極め、幾人もの候補が挙がる中、父院の熟考の末に光源氏に決定されたのに対し、女二宮の場合は、婿候補となるのは初めから薫ただ一人であり、他の人物は父帝の念頭にはない。物語はただひたすら薫を女二宮と結婚させる方向へと突き進んでいく。あまりにもあつさり<sup>28</sup>と女二宮の結婚相手が決定したことに、読者は拍子抜けする思いであろうが、これは、物語が薫への女二宮降嫁を主題として扱ったものではなく、むしろ降嫁によって連鎖的に引き起こされる出来事の方を描きたかったからに他ならない。薫と女二宮が結婚することによって、夕霧は娘六の君を薫に縁付けるのを断念し、匂宮を六の君の婿として迎える、そしてそれによる中君の不安と薫の同情が二人を接近させるが、薫の懸想と匂宮の嫉妬に悩まされた中君は、事態を打開すべく異母妹浮舟の存在を薫に告げる、という風に、この結婚は最終的には浮舟物語の端緒をたぐり寄せるのである。であるからこそ、物語は、降嫁決定までのいきさつを長々と語ることはなく、当初から薫を結婚相手として定めていたわけであるが、本来ならば、内親王の臣下との婚姻はどのようにに軽々しく決められるべきものではなかったであろう。特に、当代の帝の娘ともなればなおさらである。史実

においては、在位中の帝の娘の降嫁は、非常に稀なことであつたのだから。<sup>28</sup>そこで、読者が当然抱くであろう疑問を言語化した形で、物語中の人々の反応が以下のように述べられる。

A 天の下響きていつくしう見えつる御かしづきに、ただ人の具したてまつりたまふぞ、なほあかず心苦しく見ゆる。「さる御ゆるしはありながらも、ただ今、かく、急がせたまふまじきことぞかし」と、譏ら<sup>そじ</sup>はしげに思ひのたまふ人もありけれど……

(5) 宿木・四七四〜四七五頁

B 「薫ハ」人柄は、げに契りことなめれど、なぞ時の帝のごとしきまで婿かしづきたまふべき。またあらじかし。九重の内に、おはします殿近きほどにて、ただ人のうちとけさぶらひて、はては宴や何やともて騒がることは」など、「紅梅大納言ハ」いみじく譏りつぶやき申したまひけれど……(同・四八三〜四八四頁)

Aは、先の②で中略した世の人々の声、Bは④の藤花宴の場面で記される紅梅大納言の心中であるが、どちらも、時の帝がどうしてそこまで慌ただしく婿取りをせねばならないのか、それにただ人を仰々しく婿として迎えるのはどうであろうか、と難じるものである。<sup>29</sup>しかし、浮舟物語へと

急ぐ作者は、女二宮と薫の婚姻話をスムーズに進めるために、今上帝について、「思したちぬること、すがすがしくおはします御心にて、来し方の例なきまで同じくはもてなきんと思しおきつるなめり」(⑤宿木・四七五頁)と、決断したらそれを実行せずにはられない性格を述べて弁解し、併せて、若菜卷の女三宮の降嫁の例を持ち出すことで、その女三宮の子息である薫が女二宮の婿となることを自然たらしめる。つまり、先ほど見たような、女二宮降嫁を話題とする時に、かつての女三宮降嫁についても触れる語り口は、全ては、帝の鍾愛する皇女の薫への降嫁を、正当化するためであった。これに関わり、女二宮の母を藤壺女御として設定することは、同じく藤壺女御を母とする女三宮を連想させ、物語中の過去の降嫁を先例として呼び込むことを容易にしたのである。<sup>(30)</sup>

以上のように、『源氏物語』第二・第三の藤壺は、第一の藤壺たる桐壺帝藤壺中宮が物語外部の『宇津保物語』あて宮を原型とするのは異なり、物語の内部——その過去に居所決定の理由があることを明らかにした。朱雀帝藤壺女御は桐壺帝藤壺中宮を、今上帝藤壺女御は朱雀帝藤壺女御を、それぞれなぞるようにして描かれる。繰り返される藤壺は、過去の登場人物と重ね合わされるわけであるが、そ

れは単純な反復などでは決してなかった。<sup>(31)</sup> そのような設定は、過去を引き寄せつつも、同時にその過去によって新たな物語を紡ぎだしていくために、施されたのであった。<sup>(32)</sup>

#### 四、結び

宿木巻において女二宮の母が昔の麗景殿から藤壺へと居所変更されていることは、夫東宮の即位に伴う当然の処遇なのであった。史実を参照してみると、夫が東宮御所から帝の常御殿である清涼殿に入った際、妻の皇妃も、夫の新たな住まいに近接する殿舎に移御することが、ならわしとなっていた。居所の再設定は、当時の現実を正しく踏まえている点で読者を納得させるが、一方でそれは嫌が応でも居所を同じくし、境遇も類似する過去の登場人物——第二部にその名を見せる女三宮の母女御を想起させる。物語は朱雀朝藤壺女御とその娘女三宮を、今上帝藤壺女御・女二宮母子と関係づけ、若菜卷の女三宮降嫁という内なる準拠に基づき、女二宮を薫と結婚させることをたやすく達成するのである。

『源氏物語』が長編物語であること——長大な時間の叙述こそが、過去を利用し新たな展開を導き出すことを可能にするわけだが、この物語において、そのような技法が引

歌などで見られることについては、指摘があった。<sup>(3)</sup>それのみならず、登場人物の細かい居所の設定にもさりげなく用いられているのである。『源氏物語』は、後宮殿舎設定の有用性に目をつけ、それを巧みに駆使して物語世界を形成していくのであった。<sup>(4)</sup>

※『源氏物語』『榮花物語』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。引用文には私に傍線や注記を施した。

### 【注】

- (1) 鷺山茂雄「薫と中君―密通回避をめぐる―」（『源氏物語主題論』、一九八五年、搞書房）は、麗景殿から藤壺への移転を不自然なものに見なし、その理由について考察する。
- (2) 「藤壺の系譜―『宇津保物語』あて宮を始発として―」（『中古文学』二〇一〇年十二月）。本稿で「前稿」と記したものは、全てこれを指す。
- (3) 増田「弘徽殿と藤壺―源氏物語の後宮―」（『国語と国文学』一九八四年十一月）、高田「後宮殿舎の使われ方―玉鬘の宮仕え―」（『源氏物語考証稿』、二〇一〇年、武蔵野書院）。
- (4) 定子の梅壺居住については、拙稿「斎宮女御の梅壺入り―後見との関わりをめぐる―」（『国語と国文学』二〇一一年一月）で取り上げたことがある。
- (5) 山下克明「平安時代初期における『東宮』とその所在地について」（『古代文化』一九八一年十二月）。氏によると、醍醐朝東宮保明親王までは内裏東の西雅院（西前坊）を東宮御所に用いていたが、菅原道真の怨霊の仕業とされた保明親王の死の穢れをはばかって、その後は職御曹司を経て後宮内の殿舎（梅壺や梨壺）が皇太子在所として用いられるようになったという。なお、保明親王以前の東宮の妃の居所は、東雅院であったと想定される（拙稿「『宇津保物語』の東宮後宮―梨壺の問題を中心に―」（『日本文学』二〇〇八年十二月）。
- (6) 安子と藤壺・梨壺については、拙稿注2・注4論文参照。
- (7) 今夕一品禎子内親王（三條院親王）、被參東宮……可坐弘徽殿云々、東宮息所以弘徽殿為直慮未為是而已、（『小右記』万寿四年三月二十三日条）これによれば、東宮妃が弘徽殿に入る初例であったという。参照。ちなみに、梅壺と登花殿は、距離ではかなり近いものの、現在広く知られる内裏図では、廊などで直接つなが

つておらず、行き来するには遠回りをしないとイケないような印象を受ける。だが、『天内裏図考証』の登花殿の項（按、據諸圖、西面渡廊、當西庇南第一間、對擬花舍東孫庇北第二間階）を参照すれば、登花殿・梅壺間には、渡廊がかかっていた時期もあるようである。

(8) 『小記目録』長元二年正月八日条。

(9) 『小右記』長元五年十一月二日条に宣耀殿、『左経記』同八年四月二十七日条には麗景殿を用いていたことが見えるが、後述の『栄花物語』暮まつほし巻の記述によると、禎子は隣接する両殿舎を同時使用していたのである。殿舎の同時使用については、高田注<sup>3</sup>論文、拙稿「宇津保物語」后宮考―常寧殿を居所とする母后―（『国語と国文学』二〇〇八年八月）を参照されたい。

(10) 『春記』によれば、これより先、長久元年十二月十六日に、尊仁親王と後朱雀天皇の対面儀のため、禎子が尊仁を連れて参内したことはあったが、当時の内裏は里内裏二条殿であった。同十八日条によると、この長久元年の参内は四年ぶりのことだったという。

(11) 『新編日本古典文学全集』頭注は、東宮親仁親王妃章子内親王が梨壺北舎を上御局としていた例（③暮まつほし・三〇八頁）を参考にし、「道子は昭陽舎北舎を上御局に、宣

耀殿を居殿にしていた、の意か」と解する。

(12) 『史料綜覧』所引『為房卿記』承暦三年五月二十七日条、『師記』永保元年正月二日条。

(13) 『師記』永保元年十一月二十八日条、『史料綜覧』所引『為房卿記』同二十九日条。

(14) 梅枝巻に「この御方（＝明石姫君ノ局）は、〔光源氏ノ〕昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて」（③四一四頁）とある。

(15) 物語の始発において、明石姫君の祖母である桐壺更衣が、地位の低さから清涼殿から最も離れた桐壺に住まい、清涼殿に出向く度に、その途中にある殿舎に住む皇妃たちの嫌がらせを受けたことが、思い起こされる。

(16) 『宇津保物語』では、国譲下巻で新帝が即位した際、皇妃たちの殿舎が新しく定められ、あて宮（藤壺）と仲忠妹（梨壺）以外は、居所が変更されたようである。例えば、小宮（嵯峨院皇女）の居所となった承香殿は、その東宮妃時代には、朱雀帝の女御によって用いられていたのだから、彼女は以前には、別の殿舎に住んでいたはずである。なお、あて宮・仲忠妹の居所が変わらないことの意味については、拙稿注2・4論文で論じた。

(17) 冷泉朝では、恐らく、帝の母藤壺女院が桐壺朝と同様に使用していたのであろう。

(18) 延喜御時承香殿女御正三位源和子は光孝天皇の源氏也此女御の御腹に慶子詔子齋子内親王三人ありいま女三宮はこれになすらふるにや  
〔花鳥餘情〕若菜上

(19) 今井源衛「女三宮の降嫁」〔源氏物語の研究〕、一九六二年、未來社)、安藤太郎「朱雀院女三宮の準拠と女二宮―源氏物語第二部の一考察―」〔言語と文芸〕一九七五年六月)、後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合―」〔源氏物語の史的空間〕、一九八六年、東京大学出版会。

(20) 増田注3論文。

(21) 藤壺に入った皇妃には、醍醐朝の素性不明の某女御、村上朝の藤原安子、藤原芳子がいる(拙稿注2論文)。この内安子については、誰よりも早く村上天皇(成明親王)に入内し、その後には夫と皇子女を残して亡くなった点は注目されるものの、立后を果たし、その腹の皇子が立坊するなど、物語の女三宮母とはかけ離れた榮華に包まれた生涯を送った。

(22) 光源氏による女三宮入内案については、室田知香「若菜上巻冒頭における「後見」の論理と光る源氏―史上の皇女の入内・結婚と「源氏物語」とのあいだ―」〔古代中世文学論考〕第二一集、二〇〇八年、新典社)「光源氏の後宮理念―若菜上巻冒頭の皇女降嫁論に関連して―」〔国語国文〕二〇〇八年十一月)が詳細に検討している。

(23) 清水好子「若菜上・下巻の主題と方法」〔源氏物語の文体と方法〕、一九八〇年、東京大学出版会)は、第一部の世界を思い起こさせるように、桐壺更衣や藤壺中宮と類似した設定の人物として、この藤壺女御が登場する、という見解を示す。

(24) 後に、源氏が朱雀院から直接女三宮のことを聞かされた際にも、「御心の中にも、さすがにゆかしき御ありさまなれば、思し過ぐしがたくて……」(④若菜上・四七頁)とあった。

(25) 土居奈生子「第三部における女三の宮―(大宮)たる明石中宮と女二の宮の降嫁―」〔人物で読む源氏物語〕は、今上帝が、女二宮を目の前にしながら女三宮を思い出し、さらにはそこから婚候補として薫を導き出すことについて、「女二の宮と女三の宮が、殿舎を同じくした藤壺女御の娘であることもこの連想を助けていよう」と述べており、傾聴に値する。

(26) 「花鳥餘情」は、この箇所準拠として、天曆三年四月に藤壺で藤花宴が催された際、藤原師輔が室の勤子内親王に醍醐天皇から伝えられていた琴譜を(娘安子の夫である)村上天皇に献上した事績を掲げている。

(27) 女二宮降嫁を浮舟物語の構成と密接に関わるとする論に、小穴規矩子「浮舟物語の構想―宇治十帖の結末について



の考察「序説」(『国語国文』一九五八年四月)、藤村潔「宿木卷の巻頭」(『源氏物語の構造』、一九六六年、桜楓社)、池田和臣「浮舟登場の方法をめぐって」(『源氏物語』の「源氏」取り) (『源氏物語 表現構造と水脈』、二〇〇二年、武蔵野書院、初出は『国語と国文学』一九七七年十一月)がある。池田氏は、中君を追い込み、浮舟登場を必然化するために、それ自身は目的ではない中君の苦境が丹念に物語中に描きこまれることを指摘する。

- (28) 『花鳥餘情』宿木卷の注は、嵯峨帝皇女源潔姫の藤原良房への降嫁を、唯一の明らかな事例として載せる。皇女の結婚に関しては今井源衛注19論文、今井久代「皇女の結婚―女性の宮降嫁の呼びさすもの」(『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』、二〇〇一年、風間書房)を参考にした。もっとも、紅梅大納言の場合は、自身が女二宮と結婚できなかつたことへのやっかみによる所が大きかつたであろう。
- (30) 細野はるみ「女二の宮の縁談」(『講座源氏物語の世界』第八集、一九八三年、有斐閣)。

(31) 高木和子「按察大納言」にみる方法意識」(『源氏物語の思考』、二〇〇二年、風間書房)は、『源氏物語』の三人の藤壺を例に挙げ、「ある人物の呼称に典型化された造型なり状況になりが、物語内部で重層的に引用されながら、多くは次第に小さく矮小化され、ずらされていくのは、『源氏物語』全般に認められる傾向といえよう」と説く。

(32) 吉井美弥子「宿木卷の方法」(『宿木卷と「過去」―そして「続編」が生まれる―) (『読む源氏物語 読まれる源氏物語』、二〇〇八年、森話社)。

(33) 池田注27論文、高橋亨「源氏物語の内なる物語史」(『源氏物語の対位法』、一九八二年、東京大学出版会、初出は『国語と国文学』一九七七年十一月)。

(34) 山中和也「殿舎名を冠した皇妃の呼称のかたち―宇津保の国譲下巻から源氏の承香殿女御へ―」(『古代文化』一九九〇年九月)は、『源氏物語』について、先行の『宇津保物語』と比較して格段に後宮殿舎の描き分けが進化しているとの重要な指摘を為す。